

## 福岡県で見出された緑化樹の病害(続)

福岡県林業試験場 小河 誠 司

県下で見出された緑化樹の病害については今までに種々報告しているが、その後新たに見出された病害について2~3報告する。キリエノキの病原菌の一部については林業試験場陣野好之技官に同定をいただいた。

## 1. キリエノキの枝枯性病害(写真-1)

(1) *Melanconis* sp.

病徴; 枯枝の一部が黒褐色から黒紫褐色に明瞭に変色する部分に表皮を破って黒色小隆起物が突出するのが認められる。この小隆起の頂部は不規則に裂開し小突起が1~数個認められる。

病原菌; 子のう殻は2~3個連続して作られる場合が多く、フラスコ状で殻壁は黒色で明瞭である。子のうは棍棒状で内部に8個の子のう胞子を含む。子のう胞子は黒褐色(暗褐色)で2細胞、楕円形で両端が円味を帯び、大きさ $2.0.0\sim 2.5.0\mu\times 10.0\mu$ 。また、子のう胞子は子のう内に不整2列に並ぶ。

(2) *Melanconium* sp.

病徴; 枯枝の一部に紫褐色(明るい)変色部に周囲がやゝ隆起し、中央部にかけて陥没、さらに中央開口部が突起している小隆起物が認められる。

病原菌; 柄子殻の開口部はそれ程表皮外には突出せず、柄子殻も表皮下に埋没している。柄子殻壁は黒色で明瞭、殻内に球状の部屋が数個認められ、そこに単胞、黒褐色、両端に円味がある楕円形の分生胞子が充満している。分生胞子の大きさは $1.7.5\sim 2.3.8\mu\times 1.0.0\sim 1.1.3\mu$ 。

(3) *Botryosphaeria* sp.

病徴; 黒紫褐色から黒褐色に変色した部分に不規則に表皮を破って隆起した黒色小粒状物(病原菌の子のう果)が多数認められ、樹皮はざらざらした感じになる。その小隆起物上部に微細な乳頭状突起(子のう殻の首)が多く認められる。また、この黒色小隆起物の表面をうすく剥ぐと黒色板の中に小円状の白色小点が並んで見える。この白色部分が病原菌の子のう果の部分である。

病原菌; 子座は表皮下に生じ、黒色でのちに外表を破って露出し、表面に多くの子のう室を並列して形成、乳頭状突起をもって開口する。子のう殻内には多数の子のうが束状に内蔵される。子のうは棍棒状で、無色、

単胞で長円形または腹部がふくらんだ菱形の子のう胞子を不整2列に内蔵する。子のう胞子の大きさは $17.0\sim 23.8\mu\times 7.5\sim 10.0\mu$ 。

## (4) 考 察

キリエノキ(*Trema cannabina*)はニレ科のウラボシ属に属し九州以南に分布する落葉低木である。

この属の樹木では*Melanconis*属あるいは*Botryosphaeria*属による病害の記録はない。ニレ科植物の枝枯性病害の記録としてはエノキ(*Celtis sinensis*)に*Melanconium celtidis*による黒粒枝枯病<sup>2)</sup>がある。キリエノキの枝枯性病害がどの病原菌によっておこされるのか、またはこれら枝枯に関与する菌の種の同定について今後詳細に検討することにした。

写真-1 *Botryosphaeria* sp.の病原菌と病徴2. ツノハンバミの葉枯病(新称)*Cercospora* sp.

病徴; 最初葉に1~2mm前後のこげ茶色(暗褐色)のやゝ角ばった斑点が作られる。のち病斑は拡大し葉脈で区切られてやゝ長方形がかった5mm前後の病斑となり、葉縁部に作られる病斑は葉縁および主脈に向けて拡大し不規則な褐色病斑となるものが多く、鋸歯の部分は乾固し巻き込む。健全部との境界はごく狭い黒紫褐色帯で囲まれる。葉裏面の病斑は黄褐色~褐色で病斑拡大後も変化がない。葉裏両面に暗緑色すすかび状物が生ずるが、主に葉裏面に多い。

病原菌; 子座は葉の両面に作られるが葉の表面に多い。分生胞子は無色、数細胞で分生子柄生部分から若干太くなり、先端は細くなるが突端部分は円く糸状、真直ぐか、わずかに彎曲する。

ノート：ツノハシバミ (*Corylus sieboldina*) はカバノキ科 (*Betulaceae*) ハシバミ属に属する落葉低木で葉は互生し卵形で重鋸歯をもっており、毛がある。カバノキ科植物で *Cercospora* 属菌による被害は筆者の文献調査範囲では認められない。この被害は、当時見本園に1本植栽されているツノハシバミに発生したもので、被害程度もそれ程激しいものではなく、ツノハシバミの緑化樹としての価値もわからないが、カバノキ科における *Cercospora* 属菌による被害がないかまたはきわめて珍らしいと思われるので記録の意味で報告する。

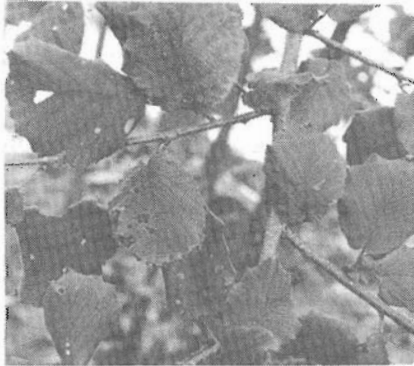


写真-2 ツノハシバミの葉枯病

### 3. ミヤマザクラの穿孔性褐斑病 (*Cercospora* sp.)

病徴；葉に1mm前後の暗褐色類円状斑点が作られる。病斑はのちに拡大するが大きくて5mm、通常2mm程度の褐色類円斑となる。円斑上には暗緑色毛ば立ったすすかび状物が作られる。病斑部は健全部との間に離層ができて脱落し孔があく。葉縁部の病斑は葉縁に沿って拡大し、やがて枯れて巻き込み乾固する。

ノート；ミヤマザクラ (*Prunus maximowiczii*) はバラ科サクラ属 (*Prunus*) に属する木である。サクラ類には *Cercospora* 属菌による病害として穿孔性褐斑病 (*C. circumscissa*) と斑点病 (*C. purunicola*) があるが、今回当時見本園で見出されたものは、病徴から考え穿孔性褐斑病であると考えられる。ミヤマザクラには穿孔性褐斑病の報告はないので新寄主として

記載した。

### 4. ヒトツバタゴの斑点病 (*Cercospora chionanthiretusi* Togashi et Katuki)

病徴；葉に2mm前後の褐色斑が作られ、のち病斑は拡大。葉脈に区切られて4~5mm不整角状斑となり中央部は灰褐色に変ずる。病斑は時にゆ合拡大し径10mm前後の病斑になるものもある。健全部との境界は濃褐色で明瞭である。葉裏は淡黄褐色で病斑拡大後も変化が少ない。葉の両面に暗緑色すすかび状の子実体が作られるが葉表に主に作られる。

ノート；ヒトツバタゴ (*Chionanthus retusus*) の斑点病は当県では1951年福岡市で発見記載されているが、その後各地で報告記載された例は少ないようである。本病は当時見本園に植栽のヒトツバタゴに発生したもので、かなり激しい斑点性被害を生じている。(写真-3) 本病については富樫・香月<sup>1)</sup>以外にくわしい記録がないので、ここでその病徴について報告した。



写真-3 ヒトツバタゴの斑点病

### 引用文献

- (1) Togashi, K., Katuki, S.: Sci. Rep. Yokohama Nat. Univ. Sec. II, №1, 1~2, 1952
- (2) Kobayashi, T.: 日本菌学会報, 9, 1~11, 1968